

健康教育[®]

— 健康なくして教育はありえない —

◎「ギフテッド」の子ども
一個々の特性を理解し伸ばすために…… 片桐 正敏

◎「表現あそび」に伸びる子の秘訣
…………… むらまつ ひろこ



「健康教育」[®]

——健康なくして教育はありえない——

1911年、河合グループ創業者である薬学博士・河合亀太郎がかかげた企業理念です。



薬学博士・河合亀太郎

こどもたちのすこやかな成長を願い、より一層お役に立てる情報のご提供・ご提案を目指し、発刊致しております。これからも、創業者・河合亀太郎の理念「健康教育」を大切に伝え続けてまいります。今後ともご愛読のほどよろしくお願い致します。

目 次

3	「ギフテッド」の子ども 一個々の特性を理解し伸ばすために—
9	「表現あそび」に伸びる子の秘訣
15	あらまし

「ギフテッド」の子ども —個々の特性を理解し伸ばすために—

北海道教育大学旭川校
教授

片桐 正敏



ギフテッドとは？

みなさんは「ギフテッド」という言葉をご存知でしょうか。「gift」という英語は非常になじみのある言葉ですが、「贈り物」という意味以外にも「(天から与えられた)才能」という意味もあります。ギフテッドは、「才能児」とか「天才児」と訳されたりしますが、今回お話する内容は、ギフテッドの子どもの「才能」とか「天才」といった部分ではなく、子ども本人の生きづらさや親、教師からみた「子どもの育てにくさ」や「関わりの難しさ」について焦点を当ててお話をします。

ギフテッドとは？

ギフテッドの定義は、世界共通のものもありませんし、日本においても定義はありません。後述しますが、アメリカのギフテッドの定義は「支援を受けるための資格要件」のようなもので、州によってまちまちです。研究者によっても微妙に差があるので、



私の著書「ギフテッドの個性を知り、伸ばす方法(小学館)」では、ギフテッドを「高い知的能力を持ち、さまざまな潜在的可能性を秘めた、配慮や支援が必

要な子ども」と定義しています。もちろん特別な才能を発揮してコンクールで入賞したり、発明をしたりする子どももいますが、必ずしもそうした子どもだけではありません。また、高い知的能力があるため勉強ができる、と思われる方も多いかも知れませんが、実際には勉強で苦しんでいるギフテッドの子どももいます。

私の関わっているギフテッドの子どもは、学校生活に馴染めず不登校になったり、気持ちの整理が上手ではなく、友人関係など周囲との関わりがうまくいかずに適応上の困難を抱えている子どもが多いです。実際のところ、本人はさほど困っていない場合もあるのですが、親や先生など周りが困っている、そんな子どもがギフテッドです。この私の本で紹介されている定義をもう少し説明してみます。

まず、知的能力について説明します。「高い知的能力」というのはどれくらいかというと、ギフテッドの場合IQ(知能指数)で130以上を指している場合が多いです。通常、IQは概ね100が平均値で、それよりも30以上知能指数が高いお子さんは、理論上2%程度しか存在しません。

確かに少ないように思いますが、非常にまれ、というわけではなく、例えばどの小学校でも一人以上はいる計算になります。もちろん知能が高いからと言って「ギフテッド」と必ずしも呼ぶわけではありません。

次に、「才能」という側面にも触れておきたいのですが、才能は一定の基準がないどころか、誰もが認める特定の才能を持った人が「才能がある」と認めない限り、才能がある(才能が顕在化する)とは認知されません。例えば、とあるテレビ番組で有名な先生が「才能あり」というから、その人は才能がある(と認知される)わけで、絵画や俳句もろくに知らない私が、「あなたには(絵画や俳句の)才能がある」といっても、それは才能があるということにはならないのです。ゴッホも生涯で売れた絵は殆どなかったとのことです。ですが、こんにちゴッホは誰もが認める「才能がある」天才画家です。でも、「生きている間」は才能がある画家でもなく、天才画家でもなかったわけです。そう考えると「才能(があるかないか)」でその後の支援を決める、なんていうのはあまりにもナンセンスではないでしょうか。死んでから認められても仕方ありません。「生きている間、いかに幸せに生きられるか。」これはとても大事なことです。

少しややこしい話になるのですが、ギフテッドは医学的な診断名ではなく教育分野の用語であって、教育上何らかの配慮や支援が必要なギフテッドの子どものための「ラベル」にすぎません。つまりラベルは、配慮や支援の対象であることをわかりやすく示すためにあります。私はラベルを好んでつけないわけではありません。本来ならばない方がいいですし、何より「ギフテッド」というラベルは非常に誤解を生みやすいので、用いたくないです(そもそも本音ではギフテッドに代わる言葉があるといいと思っています)。ですが、ラベルがないと支援が受けられない、というのも事実ですので、ラベルは配慮や支援を受けるために必要だと思っています。

私は教育者として、「(顕在化した)才能」はあるかどうかわからないけれど、「潜在的可能性」はどの子どもにもあるはずだ、と強く信じています。高い知的能力があるにもかかわらず、うまく才能を伸ばすことができず、才能を潰すのは決して許されるべき事ではないはずです。私は才能開発をせよ、とは言っていないのです。言いたいことは「子ど

もの可能性を潰さない」「才能が伸びるのを大人が邪魔しない」ということです。子ども自身も才能を伸ばしてほしい、というよりも圧倒的に「(自分のやりたいことの)邪魔をしないでほしい」と思っています。

日本にはどれくらいギフテッドがいる？

結論を言うと、日本におけるギフテッドの子どもの数はわかりません。前述したように、世界共通の定義がありません。アメリカの場合では、それぞれの州でギフテッドの支援を受けるために(診断ではなく)「認定」を行っており、認定要件としての定義があります。そのため、IQの基準もマチマチです。本来なら潜在的可能性は誰にでもあり、能力が高そうな子どもはどんどんギフテッド教育を受けられるようにすればよいのですが、流石に財政上の問題があり、無制限にというわけにはいきません。IQの基準を和らげると、それだけ対象者が多くなります。つまり、州の財政規模や政策的な問題から統一的な基準がありません。

アメリカ全体では約6.5%がギフテッドと認定されています。幼稚園から高校でギフテッド教育を受けている幼児児童生徒は、およそ370万人と言われており(Worrell et al., 2019)、特別支援教育の枠組みで支援が行われています。日本では支援を受ける定義や基準すらありませんので、ギフテッドの子どもの数は推定するしかありませんが、人種間の差がないとすれば、アメリカの認定者割合の6.5%と同程度日本にも存在する可能性はあるかもしれません。そう考えると、非常に多い数です。

ギフテッドの特性

ギフテッドは、前述したように高い知能を持っていますが、一方では配慮や支援が必要な子どもたちです。なぜ知能が高いのに配慮や支援が必要なのでしょう。その理由は大きく分けて3つあり

ます。

①知的能力のアンバランスさ

ギフテッドの子どもに検査を行う際、私たちはウェクスラー式知能検査(WISCやWAISといった検査があります)を用いています。この検査では、言語理解能力や言語に依存しない視覚でものを捉えたり推論したりする能力、記憶力、作業の効率性などといった能力を見ることができます。これらはもちろん、人間の知能のほんの一部分しか見ていませんので、当然人間の認知や知能を隅々まで理解することは到底できませんが、測定上の限界を知り、いくつかの知的・認知能力を客観的に大まかに知る上では有用な検査です。

どんなものでもバランスが良いのに越したことはありません。人間の認知能力もそうですが、概して多くの人間の認知能力はバラバラです。問題はそれらの認知能力がどれくらいアンバランスであるか、ということです。バランスが悪ければ悪いほど制御が難しいので苦労することになります。例えば、自動車のタイヤを人間の認知能力としましょう。自動車では、性能や大きさの違うタイヤをそれぞれ前方と後方にはかせてみると、とてもまっすぐには進めそうもありません。タイヤの性能や大きさが異なり、その開きがあればあるほど運転が困難になります。しかもエンジンは高馬力です。ひとまず進めたとしても、運転には相当な技術が必要になってくるのは容易に想像がつくでしょう。タイヤの大きさや性能(クセ)をある程度知っていれば、知らないよりは運転が楽になるでしょうか。それで

も相当大変そうです。人の認知と車のタイヤと異なる点(根本から異なりますが、それは置いておいて)は、人の認知はタイヤと異なって付替えができませんが(当たり前ですが)、クセを直したり、大きさを変えたりすることができます。ですが、そんなに大きな変更はできませんし、何よりゆっくり時間をかけなければいけません。

まとめますと、人間にはいくつかの認知能力があり、それらを総合したものを(一応)知能と呼んでいます。そしてそれぞれの認知能力には得意、不得意(強み、弱み)があつて、それらの差が極端に開いているのがギフテッドです。極端に得意な認知能力を持っているとどうなるか、不得意な方はどんどん使わなくなります。例えば右利きの人は、左手を使えなくはないのですが、日頃から使っていないので、右手に比べて極端に不器用です。では、左を使う訓練をするか、というと、よほどのことがない限りしません。なぜなら右手で十分左手でできないことを補えるからです。そして、なにより無意味で面倒です。

②過度激動(Overexcitability)

あまり聞き馴染みのない言葉ですが、過度激動はギフテッドの大きな特徴でもあります。過度激動とはポーランドの精神医学者であるドンブロフスキが用いた用語です。字義通りに解釈すれば「過度で激しい行動や感情」となるでしょうか。ギフテッドの過度激動は次の表(表1)のように5つの過度激動があるとされています。

■ 表1:過度激動の5つのタイプ

精神運動性過度激動	積極性や行動力、探究する力や行動がみられる 好奇心旺盛で、思いついたことを片っ端から行動に移す、刺激を取り込む
感覚性過度激動	視覚や聴覚、嗅覚、触覚、味覚に対して過敏で避ける 逆に特定の感覚を好む
想像性過度激動	想像力や空想、連想の豊かさ、発明につながるような創造的活動を好む 空想に没入するあまり、ぼーっとして見えることがある
知性過度激動	積極的に知識を獲得し理解しようとする、知的・言語能力が早熟 合理的で理屈っぽい、納得できないものは取り組まない
情動性過度激動	感情の起伏の大きさや調整の難しさ、特定の人・ものに対する強い愛着 自分や他人の感情に敏感で疲れやすい

まず注意していただきたいのは、ギフテッドの子どもでもこれらの過度激動全てが見られるわけではありません。1つないしは2つくらいしか満たしていない、1つ1つぱっちり当てはまっていないけれど、それぞれ部分的に満たしている、といったことがあるかもしれません。ですが、全くどれにも当てはまらない、ということもないでしょう。次に述べる発達障害の特性やこれら過度激動のいずれも当てはまらないのであれば、特段日常生活困ることはないかもしれません。ですから、あえて「ギフテッド」とラベルをつける必要もないでしょう。過度激動の一部は、発達障害の特性と似ている部分もあります。確かに重なる部分もあるでしょうが、過度激動の特性と発達障害の特性とは分けて考えたほうが、子どもの特性を理解しやすいと思う側面も個人的に経験しています。

表1に示している特徴をもう少し具体的にエピソードにして示してみます。

(1) 精神運動性過度激動

A君は幼少期から言葉が達者で、小学校に入ってからより一層お喋りが止まりません。活動的で目を離すと何処かへ行ってしまうたり、体を動かしたり、目についたものをいじったりします。他人の家の冷蔵庫の中を開けて賞味期限をチェックしている姿を見たときは、流石にお母さんの顔が青ざめたようです。

(2) 感覚性過度激動

B君は強い感覚過敏を持っています。服のタグが気になってしまったり、セーターはちくちくして着ることができません。人混みなども苦手で、気持ちが悪くなってしまう。LEDや蛍光灯はチカチカして集中できないので、白熱灯にしています。

(3) 想像性過度激動

Cさんは絵を描いたり、工作が大好きです。思い立つと何時間でも部屋にこもって工作などをします。ぼーっとしていることが多いので訊ねてみると「自分の頭の中で楽しいことを考えている」とのこと。何時間でも黙って考えていられるようです。

(4) 知性過度激動

小学校2年生のD君は知識が豊富で、本やテレビからどんどん知識や言葉を吸収してきます。母親に対してもどンドン理詰めで話をします。「これって客観的証拠は?」などと、そんな言葉どこから覚えてきたのか…。宿題についても「漢字は全部覚えているのに、なぜ書かせるのか?これは修行なのか?納得できない」と先生に詰め寄り、困らせています。

(5) 情動性過度激動

小学校3年生のEさんは、ちょっとしたことで怒りを爆発させます。「Eちゃんが悪いんじゃないの?」と言った途端、怒りを爆発させてお母さんに食ってかかります。理不尽に怒りをさんざんぶつけた後、ケロッとしてお母さんに話しかけるので、お母さんの方が気持ちの整理がつかずモヤッとすることが…。Eさんは、家では毎日親とバトルをしていますが、学校では優等生のようなようです。ですが、お友達の気持ちに寄り添いすぎて、人付き合いが時々辛いと感ずることもあるようです。

ここであげた事例は、いずれも架空のものです。イメージはだいたいつかんでいただけたかなと思います。

③ 発達障害の特性

ギフテッドで発達障害を併存しているお子さんは少なからずおられます。実際に発達障害の特性が強いなあ、と感じるギフテッドの子どもがいるのも事実ですが、一方で「本当に発達障害の診断を持っているの?」と感じるお子さんもいます。実際に誤診もあるようです (Webb, 2019)。誤診かどうかについては、私は医師ではありませんので (可能性は指摘しておきますが) 判断を控えますが、私が強調したいのは、医学的診断もギフテッドの「認定」のいずれも (公的な) 治療や支援の介入のために必要なものであって、配慮や支援の「権利」さえ与えられたのであれば、その後の実際の支援では必ずしも必要なものではない、ということです。む

しこうした診断やラベルは支援者の思考を停止させてしまいかねません。

思考を停止させてしまう、というのはどういうことかという、例えば一度「自閉症スペクトラム障害(ASD)」という枠組みで見えてしまうと、その枠組で見られなくなってしまう。ご承知の通り、自閉症スペクトラム障害といっても十人十色で、誰一人として同じ人はいません。しかも自閉症スペクトラム障害の支援技法はある程度確立されたものがいくつかあり、支援者はどうしてもそうしたものに当てはめて支援をしてしまう傾向があります。

私が申し上げたいのは、「診断」に目を向けるのではなく、一人ひとりの「子どもの特性」に目を向けて欲しいということです。発達障害とギフテッドは分けて考えるべきです。ギフテッドのお子さんに関わる際に、自閉症スペクトラム障害の特性が見られることがあります。ですが、このお子さんを「自閉症スペクトラム障害」と見るのではなく、あくまでもその特性とその特性を引き出している環境に注目してほしいのです。

ギフテッドで発達障害を併存しているお子さんを2(ツー)E(イー)(Twice-Exceptional:二重に特別な支援を必要とする)といいます。この言葉は、ギフテッドの特性についても配慮、支援しなければならず、かつ発達障害の特性にも目を向けて配慮、支援が必要であることを示しています。ギフテッドのお子さんの中には、2Eのお子さんもあります。これらのお子さんには、上述したように発達障害の特性がある人がいる一方、疑問を持つケースもあります。後者の場合、発達障害の一部を満たしているものの、診断基準を完全には満たしていないもの、過度激動があるものが含まれているかも知れません。

併存している発達障害の中で多いなあ、と私が個人的に感じるのは注意欠如多動性障害(ADHD)と発達性協調運動障害(DCD)です。自閉症スペクトラム障害や学習障害(LD)もしばしば見られます。私がお会いしたお子さんの中には、これらすべての診断をお持ちの人もありました。これら

の発達障害の特性は、先ほどの述べた過度激動の特性と重なる部分もあり、はっきりとギフテッドと発達障害の特性を切り分けるのは困難ですが、やはりこれらの特性が強く、多く出てしまうと日常生活や学校生活での困難が多いように思います。

ギフテッドの個性を伸ばすかわり

最後にギフテッドへの実際の支援、関わりについて述べさせていただきます。先ほど述べたギフテッドの3つの特性のどれもが個人内の要因ですが、これらの要因だけで日常生活や学校生活に困難を感じるわけではありません。実際のところ、ギフテッドのさまざまな難しさは、環境要因が決定的な役割を果たしています。別な言い方をすると、環境さえ整えてあげれば、ギフテッドの「弱み」が少なく、また目立たなくなり、「強み」が大いに発揮することができるようになります。これまで成功してきた偉人や起業家のほとんどが、こうした自分にあった環境を整えたり、見つけたりして自らの「強み」を発揮してきたはず。何も努力せず、自分の能力も引き出すこともなく、全て偶然を引き当てて成功した人はまずいないでしょう。成功者の全てが、本人の能力を最大限に引き出すことができる環境にいたはず。なお、私が述べている環境とは、人的環境も含みます。



配慮や支援の際には、弱みに目が向きがちですが、是非とも強みを生かした支援を考えてあげてほしいと思います。海外で行われている飛び級制度などは、「早期履修または早修 (acceleration)」と呼ばれ、まさに強みを生かした支援です。早期履修は、このほかにも早期入学や上級履修クラス、二重在籍などがあります。ただ実際には日本ではまだまだ一般的ではありません。そこですべての子どもが対象となり得る「強化履修または拡充 (enrichment)」という方法が有効かもしれません。これは、通常の学校教育における配慮や工夫を行うやり方のほか、休日の余暇プログラムや絵画や音楽、理科、数学などのコンテストなどへの参加です。なお、前者の「通常の学校教育における配慮や工夫」は、学校によっては必ずしも進めてくれる訳ではありません。こうしたものの多くは、「合理的配慮」に当たりますが、ギフテッドは合理的配慮を受ける要件を満たしていない、と考えている学校現場が多いようです。

私はギフテッドの適応上の問題は「社会的障壁」にあたると考えます。障害者差別解消法では、障害者については診断の有無を要件としておらず（つまり診断はもちろん、「ラベル」も不要）、「心身の機能の障害があつて、社会的障壁により日常生活や社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの」を障害者と定義し、合理的配慮の提供義務を課しています。ギフテッドの子どもは、発達障害などを併存している人もいるものの、ギフテッド自体障害として診断されるわけではありませんが、「社会的障壁」により日常生活や社会生活（特に学校生活）において困難さを感じている訳ですから、障害者差別解消法にある「合理的配慮」を受ける要件を満たしているはずです。しかしながら、現実には診断を受けていないと学校で配慮や支援の対象にはならないことが多く、教育現場での配慮や支援は程遠い現状があります。電車に乗る際には診断書の提示など求められないのに、学校では求めるなんて本当におかしな話です。

日本においては、まだまだ「ギフテッド」のラベルは一般的に浸透していません。保護者の方の相談

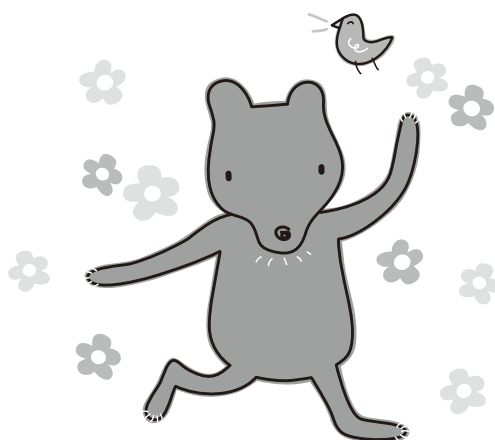
を受けていると、自分の子どもを「ギフテッド」と呼ぶのは憚れる、とおっしゃる保護者の方が本当に多いです。「自慢している」とか、「頭がいいと思っている」「（自分の子どもを）特別だと思われたい」と思われるからです。こうした偏見があるのも日本の現実です。どうしてもこの部分は変えていく必要があります。教育界では、文科省もようやく手探りながらも検討を始めたばかりです。ご関心のある方は「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」の議事録や参考資料などがホームページに掲載されていますのでご覧いただけたらと思います。

<引用文献>

片桐正敏（編著）ギフテッドの個性を知り、伸ばす方法。小学館。

Webb, J. et al. (2016). Misdiagnosis and dual diagnoses of gifted children and adults: ADHD, bipolar, OCD, Asperger's, depression, and other disorders. Second edition. Tucson, AZ: Great Potential Press, Inc. (角谷詩織・榊原洋一（監訳）. ギフティッドその誤診と重複診断：心理・医療・教育の現場から。北大路書房)

Worrell, F. C. et al. (2019). Gifted Students. Annual review of psychology, 70, 551–576.



「表現あそび」に伸びる子の秘訣

一般社団法人プレイキッズシアター
代表理事
創作舞台演出家

むらまつ ひろこ



はじめに

日本全国の子ども達に、“じぶん”を表現する場を届ける。

そんな思いで、一般社団法人プレイキッズシアターを立ち上げました。

「あそぼう、つくろう、いってみよう」

合言葉は、「いいねー!」

人は、表現してはじめて、“じぶん”として生き始めます。“じぶん”として生きるためには、表現することは欠かせないのです。

表現することは、アーティストだけのもの?

そもそも表現、とはなんでしょう?

表現するのは、アーティストだけでしょうか? いえいえ、日常、私たちは誰もが自分を表現しています。「私は〇〇が好き」「嬉しいー」「モヤモヤするー」。生きている限り、いろいろな感情があり、思いがあり、それらを誰かに伝えたい、知ってほしい、受け入れてもらいたい。そう思って生活しています。

生まれたばかりの赤ちゃんを思い出してみましょう。誰に教わることもなく、喃語を話し、「ことば」の習得が始まります。人は生きるために、表現

する方法として「ことば」を持っているのです。また幼児期には、身体を通しての表現も非常に豊富です。嫌な時に、地団駄を踏んだり、嬉しいときにジャンプをする。先生やお母さんが、「嬉しい時にはジャンプしましょうね」と、教えませんよね。人間は、嬉しいときにジャンプをすることで、嬉しい気持ちがより表出できることを生まれながらに知っているわけなのです。この生まれながらに持っている「表現する力」。この力をより豊かに育てていくことは、人間としてより豊かに生きることに関わりつづけるのではないかと考えています。

あそびのセンスは、ぴかいち

子ども達と接しているみなさん、“子どもって遊びの達人”と思う時、ありませんか?

「いない、いない、ばあ」を何回、何十回やっても、ケタケタと笑う子ども達。大人の気持ちとすると、「飽きないのかなあ」と思うときもありますが、



楽しみ続けることができます。また、ごっこあそびをしている子ども達の様子をみても、同じことの繰り返しのあそびもあれば、次々に変化していく時もあり、子ども達は新たな楽しみを発見しながら、世界を広げていきます。子ども達は、「あそびの天才」と思うのです。遊んでいる時、子ども達は、様々な感情が生れてきます。そして、この「あそび」を通して、子ども達は多くを学び、他者を知り、自分を知りながら成長していきます。

表現力を育む一つに、「ごっこあそび」が挙げられます。「ごっこあそび」の極意は、まさに、様々な物や人に自分を変身をして、疑似体験をし、その体験をすることによって、時に自分を客観視したり、他の人の気持ちを感じたり、多角的な視点を持つようになります。また「自分ではない人になる」という日常とは違う設定の中だから思い切ることができることや、言えることもあるわけです。欧米では、公教育において「ドラマ」という授業があります。この「ドラマ」の授業の中で、多角的な感情やものの考え方を子ども達は当たり前のように学んでいきます。またフィンランドで、「いじめ」が問題になった時、「ドラマ」の手法を使った授業を取り入れたことで、「いじめ」が減少した事例もあります。他の誰かの気持ちになってみる、感じてみる、考えてみる。この「ごっこあそび」の中には多くの学びが含まれており、幼児期のあそびの中で大切な一つと言えるでしょう。

表現あそびに隠された秘密

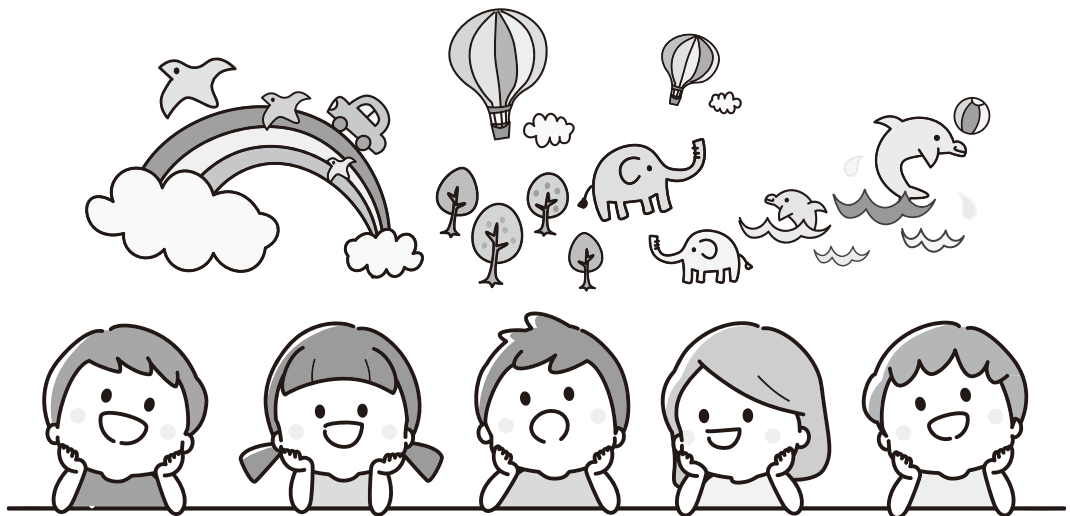
みなさんが、保育の現場で行っている、「表現あそび」「ごっこあそび」をひも解いてみましょう。想像の世界に、正解も不正解ありません。子ども達が考える想像の世界はすべて「正解」なのです。子ども達は表現あそびの中で空想し、いろいろな登場人物に変身していきます。自分ではない人に変身すると自分で「決め」、その人のキャラクターや性格なども、想像し、その人の気持ちや考えに沿って、子どもは「行動」し、あそびを展開させていきます。そして、お友達もまた同じく、何か別の何かに変身しているわけですから、いつものお友達とは違う誰かと出会い、「会話」を重ねていきます。この過程で、子ども達の脳の中で、どんなことが起こっているか整理してみましょう。

1) 決断力

子どもは、「表現あそび」「ごっこあそび」の中で、自分で決断することを経験しています。いつもは、「〇〇しなさい」と指示されることが多い子ども達かもしれませんが、この遊びの過程においては、自分で小さな決断を多く経験しているのです。

2) 共感力

違う人の立場でものを考える、多角的な視点。ごっこ遊びの中で、「お母さん役」「猫役」「電



車役」いろいろなものに子ども達は変身します。そしてその時、その役として、どう思うのか、どう感じるのか、何を言ったらいいのか、など、子ども達は、その立場になって、物事を考える思考が働きます。自分とは違う人の気持ちや考え方を想像していくプロセスは、他者理解、多角的な視点などに発展していく大切な土台となります。

3)対話力

「表現あそび」「ごっこあそび」に、もちろん台本はありませんから、子ども達の発想で次から次に、いろいろなことが起こっていきます。そしてその都度、子ども達は臨機応変にコミュニケーションをとり、展開させていきます。時に、問題が勃発するときもあります。そしてそれをなんとか解決しようと子ども達は努力するでしょう。解決できる時もあれば、解決できない時もある。対話力・問題解決能力に加えて、失敗することを受け入れ、また次に挑戦してみる力にもつながります。

このように、表現あそびの中には子ども達の成長過程において、とても大切な要素がたくさん詰まっているのです。

私も、子ども達と表現あそび、劇遊び、ゼロから子ども達とお話をつくり、舞台発表を行う活動をしています。そこで出会う子ども達は本当に様々。「聞いて聞いてー」と自分の発想を思いのまま話せる子どもから、一人部屋の隅っこで、人と関わりたくなくて座っている子ども、お母さんの後ろに隠れている子どもなどその子らしい態度(表現)から始まります。

しかし素晴らしいのは、「こんにちは」と声をかけても、目を合わすこともなければ、返事もない子ども達が、表現あそびをしていく中で、みるみる変化し、さっきまで、目を合わせず誰とも打ち解けていなかったなんて嘘のように、いつの間にか子ども達の輪の中で、のびのびと、自分の想像したことを伝え、その子らしい表情で楽しんでいる姿に変容を遂げるのです。それは本当に感動的

で、もう数えきれないほどの現場で出会ってきています。

子どもが 劇的に変わるポイント

大切なキーワードは、
【環境】【言葉かけ】【子どもを信じる】
そして【大人のあそび心】

★ ポイント1 環境 ★

例えば、会社の上司がとつても厳しく、失敗することを許さない環境で、ピリピリした職場だとします。その環境下では、“何かに挑戦してみよう”というよりも、上司の顔色を見ながら、上司が望む成果を出すことにシフトし、本来の自分を発揮できないかもしれません。安心安全な環境は、子ども達が関わるクラス運営だけではなく、大人が所属している組織自体も、安心安全である環境を整えていくことが、やがて子ども達にも派生していくように感じています。

★ ポイント2 言葉かけ ★

私たちの活動の合言葉は「いいねー!」です。演劇教育のマインドに、「YES and」というのがあります。日本人は、どうしても、「いいねー。でもさー」「そうなんだけどー」と、「YES but」の会話が多いんですね。要するに、認めていないのです。「YSE but」で育った子ども達は、やはり人の話も中途半端にしか聞かなかったり、他者を受け入れていく感覚が育ちません。ですので、子どもの話を聞くととき、この「YES and」の感覚を持ってみてください。子どもの話を聞いている時、案外大人である私たちの価値を押し付けていることに気付くかもしれません。子どもを主語にして、子どもの世界を覗きこんでみる感覚で子ども達の話の話を聞くと、そこには素朴で素敵な世界が広がっているのです。その時、大人が感じた素直な気持ちを子ども達にフィードバックしてみてください。

「先生、ぼくの気持ちわかってくれた!」「先生は、私の世界を認めてくれた!」そんな瞬間が生れることでしょう。

★ ポイント3 子どもを信じる ★

一人一人の子ども達の中には、宇宙があります。そして、私たち大人のなかにも、同じく一人一人の素晴らしい持ち味の世界が広がっています。

「子ども達に○○させよう」と思えば思うほど、子ども達は逃げていきます。させられて楽しい遊びも仕事ありません。子ども達が主体的に活動に参加し、自分の好きを発見し、存在していることに価値がある人間であると本気で思う気持ちはこれからなおさら大切なのではないかと思うのです。

★ ポイント4 大人のあそび心 ★

心身ともに健康であると、ワクワク、ドキドキする楽しいことを始めたくなったりします。逆にワクワクドキドキ、楽しいことが目の前にあると、気持ちも体も元気になることもありますよね。この人間の情動は、とても大切です。日常生活の繰り返しの中で、大人も自分自身の「ワクワクポイント」を見つけていくことで、あそび心が豊かに活動し始めます。「こうしたら面白いかも」「へー○○ちゃん、これがすきなんだ」と、ワクワクポイントを探し始めると、日常の何気ない活動が楽しくもなってきます。

ある脳科学者の方の本に書いてあったのですが、日本人は1日で、6万回もの自問自答を頭の中で繰り返しているそうです。そしてその自問自答の内容の8割がネガティブなことだと言われており、一日中ネガティブオーラを自分自身にかけていることになります。その状況で、子ども達とワクワク楽しいことを取り組もうと思っても至難の業です。大人の私たちが自分自身へポジティブな声かけをすることと、加えて子ども達に対しても、ポジティブにフォーカスをしようと頭を働かせることで、今まで見逃していた子ども達の楽しいワクワクが目飛び込んでくるようになります。

子どもが変わると 保護者が変わる?!

この活動を通して、子ども達の変化もちろんですが、お母さん達の表情や考え方も、変わってくるのがわかります。初めての子育てにおいて、幼児教育の専門書も、インターネットの情報も豊富な今だからこそその悩みが、お母さん達にはあるように感じます。「ハイハイする時期が遅いかも…」「コトバの発達が遅いかも…」「おもちゃの貸し借りができない…」「〇歳なのに、○○できない」「周りではできているのに、うちの子は○○が遅い」と、ないない星人になりがちです。どうして?

平均的な人格を育てようとしている傾向にあるからです。人と比べてできないことにフォーカスする思考が強く、親世代・保育者世代もそのように教育されてきたからです。世の中では、「多様性」や「個性を伸ばす」方向を大切にしようという動きがありますが、親世代・保育者世代が過ごした幼児期に、「多様性を認め合う環境」を経験していないわけですから、どのように今の子ども達と向き合い、取り組んで行ったらいいか、また、「多様性」をどのように保育現場に取り入れていけばいいのか模索しているのが今の時代です。それは私も同じでした。子どもを認めるってどういうこと?子どもを認めたら、ただのわがままになるんじゃないの?など、疑問も湧いてきます。

例えば、こんな経験ありませんか?時間に遅れそうなのに、靴を自分で履きたいと子どもに駄々をこねられる。「もう時間に遅れそうなんだからー」とつい怒ってしまう。

そこで、ふと、子どもの視点に目を向けてみるのです。大人の視点から子どもの視点へ変えてみると、靴紐の仕組みを研究しているかもしれません。自分の足の指とつめの付き方をじっくり観察しているかもしれません。靴を何か別のものに見立てて空想の世界であそんでいるかもしれないのです。その時、大人の「あそび心」が働くと、子どもの視点から広がる、その子らしい世界を垣間見ることができるのです。一瞬、その子の今大切に

している世界に心を傾け、感じたコトバをその子に投げかけてあげる、大人の「あそび心」が、多様性の入り口かもしれないと感じています。

表現あそびの場で、子ども達は、様々な素朴な発見をしていきます。そしてそこで大いに遊ぶのです。ただの1枚の大きな布なのに、その布1枚で1時間、様々な想像を繰り広げながら遊びきることができる子ども達の様子をみたお母さん達は、驚き、そしてわが子が見方が変わるようなのです。子ども達の「多様性」と出会うんですね。子ども達が、目をキラキラさせ、初めて会ったお友達とも「表現あそび」を通して出会い、自分の意見を伝え、受け入れてもらい、遊びが次から次に発展していく様子は、時に涙がでるほど、美しいものもあります。人は、思いを伝え、表現し、受け入れてもらう中で、解き放たれていきます。そして、お母さん達は、わが子に対して、何を伝え、どんな教育を大切にしていきたいか、考えるようです。泳げないよりは、泳げた方がいい(に違いない)。算数、できないよりは、できたほうがいい(に違いない)。それが、わが子に対して、大切に伝えたい教育なのだろうか。とふと立ち止まる。そんな瞬間です。

保育園・幼稚園で表現あそびのワークショップをさせていただく時も同じです。いつもは、全く自分の意見を言わない子どもが、「表現あそび」の中

で、その子らしいアイデアを積極的に言ったり、いつもは仲間としては遊ばない同志が急に一緒にグループになって創作活動に入ったり、様々な変化が見られます。子ども達のこの変化を保育者の方が見ることで、日常の保育の中で大切にしていることを再認識したり、また、日頃の保育の中で取り入れられそうな対話や表現あそびの取組みのヒントが浮かび、保育の仕事がより楽しいものに变化していくようです。

目立ちたくない大学生達

金沢大学の金間大介教授の著書「先生、どうか、皆の前でほめないでください」(東洋経済新報社)の中で、大学生が「自分の提案が採用されるのが怖い」「浮いたらどうしよう」といつも考えてしまう」と答える確率が高いことが載っていました。自分で決断し、そしてその決断に責任が伴ってくることを避けたい思考が働くんですね。小学生と活動をしていても、「自分が考えていることを言ったら、ひとりぼっちになっちゃうかも」と他の子ども達と違う感覚を外に出さず、隠す子ども達もいます。本当は、自分のことを知ってもらいたいし、理解してもらいたい。そんな心の声が聞こえてきます。これだけ飽食の時代で豊かな日本に暮



らしながら、子ども達の幸せとは何か。私たち大人が、子ども達にどんなことを伝えていけるのか、考えさせられる日々でもあります。

未来へ

ただただ、子ども達は、自分の想いや気持ちを知ってほしい。自分の存在をそのまま、まるごとOKと受け入れてほしい。そんなことを伝えているのではないかとさえ思うのです。人は、自分の感情や考え、思いを伝えて、それを受け止めてもらうことで生きていける生き物だと思います。日本の孤独孤立問題、引きこもり、登校拒否、子ども達を取り巻く問題は様々ありますが、その解決策の一

つとして、私は「表現あそび」に、大きなヒントが隠されていると思うのです。

私達プレイキッズシアターは、全国に表現あそびの場をつくろうと奮闘中です。幼稚園・保育園での遊びの場はもちろん、先生たちとの研修なども行っております。子ども達の未来を真剣に考えて、子ども達の豊かな成長に、私たちが今できることを一緒に取り組んでいく仲間たちとタッグを組み、日本全国の子子ども達が、豊かにありのままの自分を自由に表現することが楽しいーと、感じられる機会を創っていきたいと思っています。

「表現することは、“じぶん”として生きること”であると信じ、「あそびー、つくろうー、いってみようー “じぶん”を自由に表現」する保育現場を応援しています。



子どもたちの「コトバ」をつむぎ、「今」を伝える

プレイキッズシアター

PLAY KIDS Theater

プレイキッズシアターは、
舞台×教育×社会をつなげ、
子ども達の魅力を引き出し、
じぶんを自由に表現できる場を
全国に届けます！

■プレイキッズシアターホームページ
<https://www.playkidstheater.jp/>

プレイキッズシアター
公式ラインアカウント
はこちらから



■執筆者紹介

片桐 正敏(かたぎり まさとし)

北海道教育大学旭川校教授。北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)、公認心理師、臨床発達心理士、特別支援教育士スーパーバイザー。国立精神神経医療研究センター精神保健研究所、富山大学大学院医学薬学研究部、浜松医科大学子どものこころの発達研究センターを経て、現職。専門は、臨床発達心理学、発達認知神経科学、特別支援教育。基礎的な研究と併行して、臨床研究も行っている。発達障害のある子どもやギフテッドの相談支援活動も行っている。

むらまつ ひろこ

子ども創作舞台演出家／一般社団法人プレイキッズシアター代表理事。子ども達のアイデアやコトバを紡ぎ、個性を引き出すことで、世界に一つだけの舞台を創作。その様子はドキュメンタリー映画「じぶんのことば」にも取り上げられる。子ども演劇、ミュージカルの演出だけでなく、あそびの場、ワークショップの主催&ファシリテート、教育現場での講演、舞台やコンサート企画演出などに取り組む。今までワークショップで出会った子どもは、全国で延べ3万人。子ども達とゼロから創作した舞台は40作品を超える。外資系化粧品会社教育・人事経験のある舞台人。

「考えたこと・感じたことは、全部正解。合言葉は“いいね”」自分を知り、仲間との違いを面白いと思える環境をつくる中で、“表現者”へと踏み出していく過程の子ども達と丁寧に向き合い、一人一人の個性が放たれ認められる場を目指す。演劇的手法を用い、“すべての人に、「ありのままの自分」を表現する場を!”の思いから、ジャンルの垣根を超えたムーブメントを起こそうと奮闘中。

■協力園

表紙:社会福祉法人 富士杉の子会 外神あけぼの保育園(静岡県 富士宮市)

■「健康教育®」あらまし

こどもたちのすこやかな成長を願って創刊された季刊誌「健康教育®」。

1956年の創刊以来、創業者・河合亀太郎の信念を伝え続けております。

読者対象 / 日本全国の小中学校・幼稚園・保育園の学校長や園長を始めとする先生方・保健主事・養護教諭・給食関係者など。

平素より「健康教育®」をご愛読頂きまして、誠にありがとうございます。

編集部では、皆様のお役に立つよりよい紙面づくりを目指しており、皆さまが実践されている健康教育の参考にして頂ければ幸いです。ご覧になりたい内容やテーマ、また各園・学校紹介(例:当園では、健康教育の一貫として、このようなことを行っています等)、そのほかご意見・ご感想がありましたら是非お聞かせください。

なお、お問い合わせは下記の連絡先までお願い致します。

お問い合わせ・ご連絡先

河合薬業株式会社 「健康教育®」編集部

〒164-0001 東京都中野区中野 6丁目3番5号

TEL: 03-3365-1110(代) FAX: 03-3365-1180

E-mail アドレス: genkikko@kawai-kanyu.co.jp

ホームページアドレス: <https://www.kawai-kanyu.co.jp>

「肝油ドロップ」って、なんだろう。



それは「元気っ子ビタミン」。



カルシウム肝油ドロップ

ビタミン A・D・カルシウムが
入っています。



ビタミンC肝油ドロップ

ビタミン A・D・C が
入っています。

肝油ドロップは「よみきかせ」を応援しています。

カワイ肝油ドロップ presents
よ・み・き・か・せ

Tokyo fm
Life time music 80.0

FM80.0MHz 『山崎怜奈の誰かに話したかったこと。』内 (Mon-Thu 14:30頃～)

FM大阪
LAUGH & MUSIC! 95.1

FM85.1MHz 『シャンプーハット恋さんのFriday Music Show(笑)』内 (Fri 15:35頃～)

